

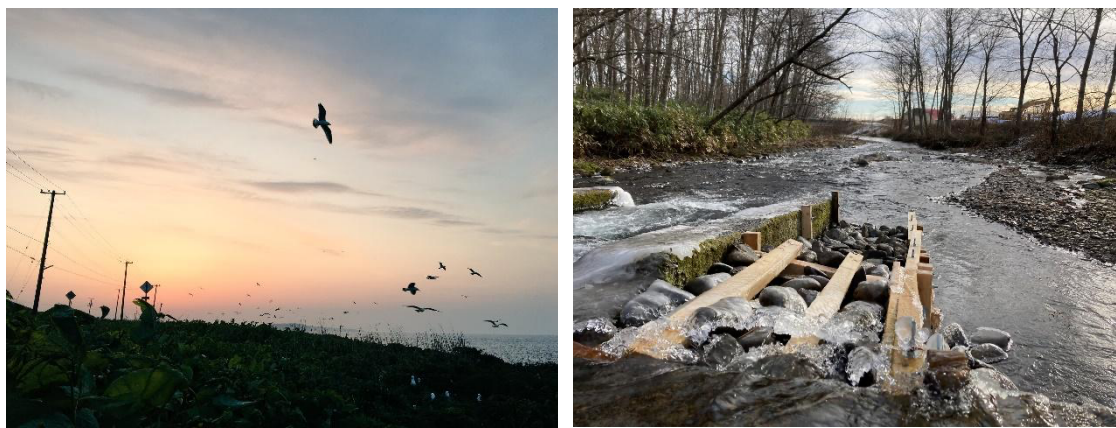
## 「現状、仕事にならない」環境保全を支える仕組みづくりを 北海道の陰の立役者が目指す保全のかたち

五藤花

北海道の一年は彩り豊かだ。春には冬眠から目覚めたシマリスが、エゾエンゴサクの水色の花絨毯を駆けていく。緑が濃くなって、地衣類が垂れ下がる苔むした森からは、エゾシカが顔をだしてこちらの様子を窺っている。カラマツが黄色く彩る頃には、サケの遡上を狙ってヒグマの親子が川で待ち伏せている。そして、川霧が立つ頃、冷え切った一面の銀世界で、タンチョウが舞う。

人々を惹き付けてやまないその美しい自然を、陰で支えている人がいる。

北海道の環境保全に取り組む長谷川理（はせがわ おさむ）さんは、現在 NPO 法人環境保全事務所 EnVision の研究員として活動している。



写真左：NPO 法人 EnVision 環境保全事務所がドブネズミの駆除を行っている天売島。北海道の海鳥の貴重な一大繁殖地となっている。

写真右：シマフクロウの餌となる魚が行き来できるように配慮した魚道。EnVision のなかでも長谷川さんが中心となって、この魚道づくりのイベントを運営した。

長谷川さんの仕事内容は、北海道の野生動物と密接にかかわっている。これまで、環境省の事業を中心に、ヒグマ、エゾシカ、タンチョウやシマフクロウなどの保全管理に携わってきた。

保全のための調査研究に加えて、市民参加型イベントも担当している。2022 年 12 月にはシマフクロウが棲める環境を整備するため、専門家と市民とが一緒に魚道をつくるイベントを運営し、多くの参加者を北海道各地から集めた。

### フラットな関係から生まれる議論が環境保全をつくる

長谷川さんの仕事の一つは、会議の運営など、合意形成の場をつくることだ。環境保全事業は誰かの一存で進められるのではない。地域の住民、大学教員などの専門家など、様々な立場の人々が協力して行う必要がある。環境保全について皆で意見交換する場が、実は北海道の自然を支える根っことして存在している。

しかし、そこでは多様な価値観が錯綜する。意見の衝突がおきる場合もあるが、保全活動を進めていくうえでは、押し問答を続けるわけにもいかない。

長谷川さんが皆をまとめる立場として大事にしていることを聞くと、「上下関係でなく、

役割分担しているという考えで、皆をフラットに考えることですね」という。誰かの意見の押し付けではなく、皆で対等に意見交換をしてゴールを目指す姿勢づくりをサポートすることが、スムーズで有意義な環境保全活動の進行につながっている。

長谷川さんは、保全にかかわる人々をつなげる根幹を担っている。その様子から、長谷川さんを「今後の北海道の環境保全を支える第一人者」と評する人もいる。

### 自主的に活動しづらい現状

現在長谷川さんが勤務する NPO 法人 EnVision では、専門的な知識や技術を活かして、環境省の事業、例えば絶滅のおそれがあるタンチョウの保全活動などを請け負っている。そういった事業中での業務が長谷川さんの仕事の多くを占めているが、長谷川さん自身は「できるなら、もっと自主的な保全事業も企画していきたい」という。



写真：国内で繁殖する唯一のツルであるタンチョウ。長谷川さんらが請け負う環境省の事業が、その保護増殖計画の一端を担っている。

そのための工夫として、助成金等を使えば、自由な発想で新しい保全活動を企画することができる。その用途は実費に限られている場合が多く、人件費にはならないが、事業を請け負ってくれた人への謝金としては用いることができる。従って、誰かが企画した保全事業を委託される形であれば、給与を受け取りながら環境保全ができるというわけだ。

とはいえ、それでは自発的に保全をしたい人が自身では生計を立てられないことになってしまう。現状、環境保全活動はお金にならないから仕事にできない、とその道をあきらめる人も少なくない。子供のころから野生動物を守る仕事に就きたいと思っていた長谷川さんも、紆余曲折を経てやっと今の職に辿り着いたようだ。

長谷川さんは、環境保全活動を支える仕組みに問題意識を持っているという。

「野生動物の保全活動を仕事としてやるのは、まだまだ選択肢が少ない。保全に携わりたいと考えている若者のためにも、仕事を増やしてあげたい。そういった企画に対して、アメリカやヨーロッパなどではもうちょっとスポンサーシップが充実していると思う。今後日本でも、社会が環境保全を支える仕組みが変わっていくことに期待したい」

人々の尽力によって生き延びてきた北海道の貴重な美しい自然。それを守り続けるため、

いま、仕組みの変革が求められている。